

真夏の夜のひとりごと

天気予報

テレビの天気予報を見ているが、「これ天気予報なの？」と首をかしげることがある。

「今日はお洗濯に適している日か?」「花粉が飛ぶからマスクをしろ」「朝晩涼しくなるから上着を持って行け」「紫外線に気をつけろ」「熱中症にならないよう水を飲め」 などなど。

こんな情報が天気予報のひとこまに必要なと思うこともしばしばで、天気予報から少し離れた話が続くことが多い。空模様を見ただけで洗濯物が乾くか乾かないか判断できない人がいるのだろうか?

天気予報で病気の心配までする必要があるのか? 気にし始めたらきりが無い。

天気予報は文部科学省、熱中症は厚生労働省と監督官庁が異なる分野の話だからなお面白い。

それにしても天気予報があたらないことが多くなってきた。巨額の費用を投じて人工衛星を沢山飛ばしている割には、数十年前に比べると「外れ」が多くなってきたように思う。局地的な気象条件の変異が多くなってきたことによるのだろうか。番組名を「天気予報」から「天気予想」に変えた方がいいかもしれない。

水と自動制御

熱中症対策に、「こまめに水分補給を」「水分・塩分の補給を」などと報道されている。

「喉の渇き」を感じて「水を飲みたい」と思った後で「水を飲む」という連鎖になる人体の自動制御。

この自動制御がうまく機能していない人に対しては、命の危険性があるので「渴く前に補給」が必要だろうが、正常に機能している人がこれをやるのは少々問題があるようにも感じる。

人間は、「喉が渇き」→「水を飲みたくなり」→「水を飲み」→「満足する」という条件反射・自動制御のプログラムを持っている。渴く前に水を飲む習慣を身に付けてしまうと、この自動制御のプログラムが機能しなくなって来る恐れがあると語るお医者さんもいるようだ。

塩の道

熱中症対策に塩分の補給が唱えられるようになってきた。あるテレビ番組を見ていたら、350mlのペットボトルの水にスプーンから溢れそうな食塩を入れていた。炎天下の道路工事に従事する人やアスリートなどが取る対策と一般人が取る対策とがごちゃ混ぜになっているように感じる。

通常の生活でかく汗に対応する塩分補給は「通常の食生活の中で摂取する塩分」で充分だと思う。

朝昼晩、手を抜かずにきちんと食事をとっていれば必要な塩分やミネラル分は確保できる筈なのに、さらに塩水を飲んだのでは、少々行き過ぎな気がする。10年後に成人病予備軍が増加しないことを願う。

努力の成果

我々が育った時代には音源はラジオそのものしか存在しなかったもので、6時半のNHKの放送を使って「夏休みのラジオ体操」が行われた。

我が町のラジオ体操は「録音されたラジオ体操のカセットテープ」で行われる。開始時刻は7時で、責任者の方の挨拶（時々講話めく）と軽いストレッチ運動の後で、音楽に合わせて始まる。

子ども達は首に下げたカードにスタンプをもらって参加確認の手続きをする。一定の回数以上参加すると「皆勤賞」がもらえることになっている。

「皆勤賞」というのは休まずにすべて勤めあげたことで貰える賞なのに、何度か出れば貰えてしまう。

努力した人と努力しなかった人との差を付けることで「努力の大事さ」を教えなければならないのに、「差を付けることを恐れる」大人が子どもの健全な育成を阻んでいる感じがする。

今日も音楽が鳴ってから走って行く子や、終了間際にのんびり歩いて行く子がいた。

朝日新聞は誰が読む？

この夏、学校でのいじめ問題から派生した傷害事件や自殺問題などが大きくとりあげられた。学校側・教育委員会など行政側の縦の組織が「事の発覚を恐れ」、「事の重大事件化を恐れ」、また一方では「問題をことさら大きくしよう」という動きが対決する形となり大きなニュースとなった。結果的に学校に警察が入らないと治まらない所にまで発展した。この経緯には特別コメントを加えるつもりはないが、前後して朝日新聞が新聞紙上で取り上げた特集に、私は注目した。

特集は、「いじめている君へ」「いじめられている君へ」というようなタイトルで、タレントやスポーツマンから学者さんに至るまでの各界の方々が短文のメッセージを発信するコラムになっていた。

コラムの中には、「いいことを言っているな」と思うものもありはしたが、「今更何を言っているんだ？」と思うものから「こんな時に何を間抜けなことを言っているんだ？」とを感じるものも散見した。

殆どの文章は「小中学校の生徒向けに書いている」という文体だったが、「この新聞は小中学校の子ども達に読まれることはない」ということに気がついた。

「大人から子どもに向けて発信するメッセージ」を「大人の情報媒体に発信」したところで、子どもたちに伝わるのだろうか。特集コラムを設けただけで中身が伴っていない。

マスコミの報道には「参加することに意義がある」という安易なアプローチはあり得ないと思うのだが。

捨てる物の価値

階段の踊り場に付けている 40W の白熱電球が切れてしまった。電気屋の店頭を見ると、白熱電球と蛍光灯の売り場面積が減ってきている。

「電力をあまり消費しない」とか「地球環境にやさしい」とか、訳のわからないキャッチフレーズをつけて売っている LED 照明はかなりの高額なものである。

古い照明器具の故障を機会に新しいもの買い替えようと言うのならいざしらず、LED 照明への切り替えだけを高らかに打ち上げてまい進するのは如何なものかと思う。まだ使えている照明器具が大量に廃棄物となり、ガラスなどの人体に危険な物が路傍に無差別に捨てられることになる。

代替品として購入する新型照明器具の購入価格に、まだ使用可能な照明器具の使用を止めることによる機会損失、そして廃棄や処分することに要する様々なコスト。

「原子力発電を全面的に止めよ」が話題になっている。蛇口をひねれば湯水のごとく出てくる電気に頼っている国民が見落としがちポイント。電気を作る費用はどうなるのだろうか？

「既存の原子力発電以外の発電に要する費用」に「新たな発電手段を作り上げるのに要する費用」が加わり、さらに「原子力発電を停止して廃炉にするまでの費用」が加わることになる。そしてそれが長い長い年月を要することになるということまでを覚悟しなければならない。

近年我が国にはびこっている、「安く買ってきて」「要らなくなったら捨てれば良い」「捨ててしまえばもう自分とは関係ない」という「ビニール傘的な発想」は改めなければならない。

以上